

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第41巻第1号 二〇〇五年七月

《翻 訳》

アルフレート・デーブリン著・岸本雅之訳

『ポーランド旅行』「^三ヴィルノ」

教会のドームには恐ろしい穴があいている。

^三一九二〇年にポリシェヴィキが残した砲弾の跡だ。

ワルシャワ駅の大待合室は木の柵で広く方形に囲われている。その中に、頼りなげな照明を受けて、座ったり、横になったり、しゃがみこんでいる大勢の人の黒い影がある。奇妙な光景だ。木のベンチにもたれて眠っている人々、待合室の真中で粗布袋の上にうつ伏して雑魚寝している人々。軒をかいたり、ため息をついている。ポケットナイフで大きな丸型パンを切り取ってムシヤムシヤ食べている人も何人かいる。私はヴィルノ行きの列車までたどり着くのに一苦労する。この中央駅では鉄道員も出札係も誰一人としてドイツ語を理解しようとしなのだ。列車に乗り込む。照明が暗くて寝台車が見つからないのだが、時間がせまっているので仕方ない。この後、私は数時間、寝台車にたどり着こうとして無駄骨を折ることになる。言葉なき戦い。というのも相手はものを言わないのだ。最初しばらくの間、ぼんやりと新聞を読んでいる紳士の隣に座っていると、検札係が入ってくる。検札係はその夜のうちにまだ数回入ってきて、さらに三度四度と浅い眠りから起こされ、乗車券を提示しなければならぬ。そのたびに私は寝台券を見せて、ドイツ語とフランス語で、一体どこですか、寝台車はどこにあるのですか、この列車に寝台車はあるのですか、と尋ねる。あきらめて横になる前に、列車の中を探してまわっても見つからない。何度やってみても車掌は寝台券と乗車券を私につき返す。私は券を見せて身振り手振りで質問するのだが、彼らは無視して乗車券と寝台券をさっさと私の手に押し戻すのだ。

その後、車室で前代未聞の異変が起こる。車掌が二人入ってきて、座席シートに上がり、側壁を引っ張った。すると、なんと左右の壁の上部からベッドが出てきたのだ。詰め物のないベッドだ。新聞を読んでいた紳士は下のシートに横になり、私はその向かいで横になる。私たちの上には、ベッドを探して片っ端からドアを開けてまわっていた二人の新参者が、金属の突っ張りに支えられて、テカテカの布の上に寝ている。一人はこの車両の車掌だ。これらの奇妙なことには驚くばかりだ。一等車で男たちが長靴を履いたまま寝転んでいるのだ。それにポーランド

の寝台車にはリンネルが一枚もないときている。私は夜明けまで迷い、立腹し、あきれた。後になって、ヴィルノ駅についてから、私はほっそりと粹な寝台車にお目にかかることになる。それは悠然と一緒に走っていたのだ。私はもう寝台券を提示することはやめていた。もううんざりしていた。

夜が白み始めてから私は車窓の外を眺めていた。ただ一度、上で寝ていた同室者が、穴のあいた木綿の靴下を履いた太い足を上から垂らして、呻きながら私の顔のすぐ前で泥で汚れた長靴を履いた時に、それは中断されただけだ。朝七時、風景が変化し、丘の多い、起伏のある地形に変わった。それまではステップのように平坦で、時折草原や耕地が見られたのだが、今は起伏に富んだ丘陵地で、広葉樹林や樅の木のおおわれている。左手を宮殿のような建物が飛び過ぎて行く。廃墟だ。トンネルの入口と出口には銃を持った歩哨が立っている。この国には不穏な空気がある。新聞はポリシェヴィキや正体不明の強盗団の襲撃を伝えていた。私は不意に、これは単なる強盗団ではなく、動乱が起きているのだと感じる。私たちの列車は狭く高い鉄橋をごくゆっくりと渡って行く。景色が素晴らしく鮮やかだ。丘陵は山に変わり、木の葉は鮮やかな黄と赤に色づき、そのなかに樅の高木の濃い緑が黙している。レールの上に長く連なる車両、その中で人の動きが生じ始める。窓外にポツリポツリと小さな家が見え始め、集落になり、街路が現れる。ヴィルノ駅、着。

凍てつくような寒い朝、ぶらぶらと並木道をゆく。道路にそって低い建物が連なっている。その多くは古ぼけてみすばらしい。その左手から通りが合流している。ずいぶん狭くてちゃんとした歩道もない。目抜き通りは立派だろうと思い、探しつづける。すると高く堂々としたアーチ門が通りを跨いでいる。歌声がする。どこから聞こえてくるのだろうかと耳を澄ませてその古い建築物の下を通り抜ける。すると右手に大勢の人が地面に伏している。農民や市民たちで、男も女も地面すれすれまで頭を下げてひざまずいているのだ。だが、歌っているのは彼らではな

い。歌は他のところから、上方から聞こえてくる。振り返って仰ぎ見ると門のアーチの上に礼拝堂がつくられており、通りから祭壇が見えるようになっていいる。そこにはたくさんの蠟燭が灯され、はっきりとは分らないがいろいろなもの置かれていいる。通りを上ってくる人々は被り物を手にしていいる。私もすでにアーチの下で帽子をとっていた。上にあるのは奇蹟を行なう聖母マリアの像だ。大変愛らしい表情をしていいる。聖母は湾曲して頑丈な動物の角のような大きな半月の上に姿を現していいる。上半身が見える。ゆったりして、たくさんの装飾がついた司祭のような衣装を身に着けて、冠をかぶった頭を右に傾けていいる。両手は胸の上に交差して置けていいる。鮮やかに彩られた豪華なガウンと衣裳からはほっそりしたうなじが現われ、その上に細面の高貴な顔がのつていいる。目はわずかに開かれたのみで、唇は閉じていいる。先のとがった金色の光線がその頭全体を取り巻いていいる。聖母は祈っていいるようにも、夢見心地のようにも見え、悲しげにも慈悲深く耳を傾けていいるようにも、悲しみにうち沈み、そこから抜け出そうとしていいるようにも見え、その表情はしかと捉えることはできない。像は暗示的に作用して人の心を動かす。救いを求めるこれらの人々はとかく彼らの苦痛を天上の存在のそれと重ね合わせて、より穏やかに苦痛から抜け出そうとするものだ。そのような像を作れるということ、彩色された像がお手本になりうるということは、芸術のすぐれた業だ。

この通りは曙の門通りという。通りはひっそりとして、お祈りしていいる人々も今は一言も発しない。角のところでは男たちが排水管を埋設していいる。私は小さな建物が並んだ、ひどい舗装の通りをのんびりと上つてゆく。朝の十時だ。だが店はまだ閉ったままだ。数軒はそれでも開いていいる。それで看板の屋号を見て気がついたのだが、閉ていいるのはユダヤ人の店だ。まだ、⁽¹⁾仮庵の祭りが続いていいるのだ。

通りが広場のように広くなる。向かいに石造りの箱のようなずいぶん古ぼけた建物がある。旧劇場だ。その前に

辻馬車が並んでいる。ある映画館のそばを通ると、ポーランド語とドイツ語の二つの言語のポスターがあることに気がつく。多くの商店の看板もドイツ語でヘブライ文字を使っている。これはワルシャワのナレフキ通りでよく見かけたもので、ここではそれが街全体に広がっている。どうやらこの都市にはたくさんのユダヤ人か、非常に勇気あるユダヤ人が住んでいるようだ。だが、次に気がついたのだが、ユダヤ人の姿がまったく見えないのだ。いくら祭日だといっても、少しはその辺を歩いているはずだ。その時、私はユダヤ人を目にしているのに見過ごしていたことに気づく。彼らは映画館の前に立つ私のすぐそばにいたのだ。若い男女たちが白い帽子を被って歩いている。年配の人たちが彼らの言語を話しながら、でこぼこした広場をわたってくる。誰もカフタンなど着ていないし、黒い「カポータ」も着ていない。誰もが皆西欧風の衣装を着ているけれど、ポーランド語を話してはいない。ここにいるのはワルシャワとは違う種類のユダヤ人なのだ。

左手の狭い通りに入ると、古い大きな建物がたくさんある。その一つは非常に古い教会のようだ。隣にあるのは修道院だろうか。けれどもその低い門を、本と皮鞆を抱え、白い帽子を被った若い男女たちが入ってゆく。学校なのだろう。暖房された低い丸天井の広間に入ると掲示物が張られていて、ドアには名称がついている。大学の講義室だ。中央通りはどこですかと私は相変わらず問いつづける。そして徐々に私の見当違いに気がついた。これがきつと中央通りなのだ。どの通りも路地のようで、小さく質素な建物が並び、曲がりくねっている。私は一段高い歩道を歩く。歩道は急に傾斜してまことに立派な側溝になっているのだ。それで路地の両側にはひどく不潔な流れができています。所々では厚板がふたをして、地下を流れているので、少しは安心して歩ける。田舎じみた服装や中流階級の服装をした男女たち。あちこちに肌色や明るい色の靴下をはいた女性たち少女たちがいる。うっすらと白粉をつけ、たいていは粗末な普段着で重々しい実用本位の長靴をはいている。商店の窓とドアには、赤と茶に塗ら

れた厚板と錠前、その上からどっしりした横木が掛けられ戸締りされている。この小路の角に警官が一人立っている。そのホテルに入る。部屋は広いが、みすばらしくカーテンがない。

市の西部、ザクレートの森からほど遠くない小さな広場に面して小さな教会があり、その金色のドームが近隣の街道に輝きを放っている。ギリシャ帰一教会だ。周辺は荒れて、粗末な建物が点在しているだけで、向かいには墓地がある。真昼のこと。その教会に入る。扉の内側には年老いた女乞食がズラリと並んでいて、誰かが扉に手をかけるとすぐさま開いてお辞儀をしている。単調な礼拝の祈り、弱々しい合唱。広い控えの間は褪色に塗られていて、窓がない。立ったり、ひざまずいている人が数人いる。円形の堂内をのぞいて見ると、上方から日光がさしていて明るい。聖堂の石の床には椅子もベンチも置かれてはいないが、周囲には、大小多数の蠟燭が灯され、花を入れた容器や絵画、お札などさまざまなものが並べられて、小さな祭壇のようになった台が幾つか配置されている。二人の幼い子供を連れた婦人が水盤がおかれたそれらの装飾された祭壇のひとつに歩みより、かるく水をつけている。それから順に子供たちを持ち上げると、子供たちも彼女を真似ている。これら祭壇の上にあるものはすべて何らかの手順を経て聖別されたか、或いはこれから聖別されるものではないかという感じを受ける。聖堂の奥は祭壇の金色の壁で仕切られている。壁は木製で天上にまでは達しておらず、その奥にもうひとつ部屋がある。壁には厳肅なビザンチン風の黄金色の下地に大きな壁画が描かれている。光輪を背にした老人たち、キリストも描かれている。使徒たちだろうか。私は何度も円堂の右手に目をやらずにおれない——というのも、次第に人が増えてきて五十人ほどにもなっており、皆控えの間で立ったりひざまずいたりして、円堂の中へもぎっしりとはみ出しており、近づけないのだ。庶民たちだが、労働者はごくわずかで、多くは女性たちだ——右手の壁のところに奇妙な構

造物があるのだ。その上には白い布と紅白の造花が垂らされ、前面には多色の織物が掛けられている。織物は屋根のような小さな突出部分もおおっている。それが彩色を施されたキリストの木の十字架像だということが次第にはつきりしてくる。そのそばには同じように花と織物で飾られた二人の聖女がいる。低い声で歌う男の音がする。どこから聞こえてくるのか分らない。円堂の中に人のいる気配はない。私の前にいる敬虔な人々はひたすら十字を切り、時折ひざまずいては体を手で支えながら額を石の床につけている。

そのとき、祭壇の中央にある金色の壁が開かれる。二つ折れの扉になっているのだ。開かれた部屋の奥には道具類が並べられた大きな台が見える。色鮮やかで丈のあるものもある。おそらく花だろう。一番奥にはまたしても金色の絵画がかかっている。そして見事な淡青色をした何かがその前や間を動いている。その淡青色は銀色と共に、白髪で白髭の司祭が身につけたガウンを彩ったものだ。司祭は奥から祭壇の扉のところまで歩み出て、低い声で歌いながら会衆に向かって十字を切り、向きを変えて器具や陳列品の置かれた大きな長方形の台のところへ戻り、儀式を執り行なっている。歌は見えないところにいる聖歌隊にひき継がれている。祭壇へ上がる階段がある。数人の少年が男女に付添われてそこへ上がり、仕切り扉の両側の金色の壁の前に並ぶ。司祭が奥から持ってきた容器を手にして、歌いながら彼らに近づいてゆく。司祭は少年たちの額を撫でているようだ。それから奥へ戻り、今度はすっかり円堂へ下りてきて、ぎっしり取り囲んだ男たち女たちのなかへ入ってくる。彼は銀色の縞の入った、素晴らしく明るい淡青色のガウンの下に薔薇のように赤い衣をまとい、腕を開いて器具を扱う時にそれが見える。青い幅広の腰紐が前に垂れている。彼の助手は年配の地味な男性で、粗末な普段着を着ている。彼は脇のほうから台を引っ張り出して、円堂の真中にある小さな祭壇の前に置く。それから鎖に吊るされて明るく炎を上げる香煙盤を上祭壇から持ってくる。老司祭がそれを受け取り、歌いながら自分の前で振り動かす。青みを帯びた煙が

もくもくと立ち昇っている。香煙の香り。白髪の司祭は合唱隊に呼応して歌い、香煙盤を振りながら、円堂に置かれたすべての台をまわり、その上に煙を漂わせる。ひざまずく人々の方に向き直っては、立ち昇る煙を浴びせかけ、歌いつづけながら大きな金色の祭壇壁のところへゆき、壁画に煙を漕ぎかけてゆく。聖別。祝別。火と煙、古の犠牲の名残。司祭は階段を上がり、祭壇奥の部屋へ入り、台にそって移動しながらこの部屋も煙で満ちた。それから、いろいろなものが置かれた大きな長方形の台のところであれやこれやの道具を引き寄せては何かしている。何をしているのだろう。神聖な法式のような感じがする。神秘的呪術的なこと、魔術的なことが執り行われているのだろう。悪評を奉られているにもかかわらずこのようなことが克服されることなく行なわれ続けているのだ。敬虔で健康そうな顔の白髭の司祭は——淡青色のガウンの下で彼は重い丸太のような長靴を引きずっている——最後に再び下の円堂に立った。会衆は来ては去って入れ替わってゆく。出入り口のところには相変わらず乞食女たちが控えている。

外へ出てみると、教会の黄金色のドームに恐ろしい穴があいている。金属板が完全に破れて、ぞっとするような闇がのぞいている。一九二〇年にポリシェヴィキが残した砲弾の跡だ。

私が話をした人の多くはロシア語ができる。ロシアに対する憎悪の痕跡も感じられない。ロシア語ができるのか尋ねると、はっとしたように微笑する。これはこの土地の人に言えることで、よそから来たポーランド人たちはワルシャワにおけると同じようにロシア人を憎み、恐れている。私はロシア時代と現在のヴィルノの市街地図を持っている。通りや広場はほとんどすべて改称されている。このことはワルシャワでは私を喜ばせ、心を高揚させてくれたのだが、奇妙なことに、ここではそんな気にはならない。それはこの都市に上から強制されたもののように思

われる。ワルシャワにおけるように内部から生じてきたものではないのだ。かつて中心部にある大通りはボルシヤヤ通りと呼ばれ、北西の大通りはゲオルギエフスキ大通りと呼ばれていた。今ではボルシヤヤ通りはヴィエルカ通りとザムコヴァ通りになり、ゲオルギエフスキ大通りにはアダム・ミツキエヴィツチの名がつけられている。それからスウオヴァツキ通りやピウスツキ通り、ジィグムント通り、コシチューシユコ通りがある。

ポーランド人は礼儀正しく多感だけれど、不実で、ロシア人は開放的で律儀で親切です、とある教養のあるご婦人が私に囁いてくれた。やれやれ、彼女は私を誤解しているのだ。私はポーランド人たちの味方だ。ポーランド人は数世紀にわたり不幸な境遇にあった。自分を隠さねばならず、率直な振る舞いができなかったのだ——そのまさに律儀で親切なロシア人の下で。抑圧は人を屈折させ弱気にさせる。加えてポーランドの国土はロシアのように広々と広大でもなく、東西南北を取り囲まれている。これで素朴な人間ができるわけがない。橋というのは陸地ののだろうか、川なのだろうか。——私は気が滅入ってしまった。

ここヴィルノ地域については議論がある。リトアニア人たちはヴィルノを彼らの首都と呼んでいる。ポーランド人はそれを占領し、リトアニアへの国境は閉鎖されている。この二つの新生国家は恒常的戦争状態にある。

小雨の降るなかドミニカ通りを歩く。黄色く汚れた水が側溝を流れている。石が敷かれた歩道が突然板敷きになる。たくさんガラス窓がつぎはぎだ。ショーウィンドーに帽子とスカーフ、リボンを展示した店がある。他の店ではリング、クッキー。辻馬車の馬たちが一本の木の下にきつなで走っている。広告塔に飛行機週間のポスター。文房具店のショーウィンドーにはヴィスビヤンスキの顔写真がかかっている。こけた頬、長くのばした口髭、頬髭、スラブ人の顔だ。その下にはある閨秀画家・詩人の写真がある。肥満してはいるが柔らかい非常に上品な顔だ。唇を固く結んで下のほうを見ている。彼女は一人の人間で、彼の方は病んだ芸術家だ。通りは左の方に広

がりながら下っている。薔薇色の軽騎兵帽をかぶった巨漢の兵士が上ってくる。書店にはレクラム文庫、シュプリンガーの美術史、レーマンの医学図解書、ラウバーの解剖学。どの店も雑貨店になりつつある。向う側に「ヴェルサイユ」という名のホテル。どうしてこんなにかましいのか。

大学の建物は古くて広大だ。国王選挙権を持つ貴族たちがジーベンビュルゲンから連れてきたポーランド^(三)国王ステファン・バトーリがこれを創立した。王は最後までポーランド語を上手に話せなかったが、国をしっかりと統治した。ヤギエヴォ家出身の年上の王妃のことは我慢するはかなかった。大学はロシア支配下の時代にギムナジウムとして使われたが、重厚な造りの堂々とした丸天井の部屋がある。長い柱廊を通して、階段を上り下りする。非常に古く、素晴らしく堅牢な、とても気持ちいがやすらぐ建物だ。戦争で砲撃をうけても耐えられるにちがいない。造られたというより、私にはむしろ有機的に成長したもののように思われる。この濃密な内部に電燈の光は似合わない。温かみのある古い木製ベンチが置かれた読書室や講義室。すべてが使いこなされ角がとれて、人間に適合し、なじんでいる。あちこちに鉄の扉がある。奥深い地下室へ下りてゆく。突然、再び暖房された大きなホールに入る。蔵書目録の部屋だ。人々は途方もなく長い時をここで過ごし、物の形をいい具合に作り変えてきたのだ。

年配の小柄な男性が案内してくれる。この館員はここにうってつけの人物だ。「注意」とか「用心」と書かれた、たくさん階段や廊下を連れられて、ようやく国立文書館にたどりつく。このような書巻を私はこれまで見たこともない。何世紀も前の古いものもあれば、もっと新しいロシア時代のものもある。数千ページの厚みのある本も少なくない。茶色のよく使い込まれた驚くほど堅牢な革装で、しっかりとしている。本の背は普通幅が狭いが、このものは表紙よりずっと幅がある。このような巨大本は紐で綴じ合わされている。一連の本に「外交録」という

題で、デーゲルというドイツ出身の男が書いたものがある。多くの本は手書きだ。館員によると文書館所蔵の公文書を並べると一五キロメートルにもなるという。裁判記録がある。言語が入り混じった奇妙なもので、題名はロシア語だが、中身はポーランド語で書かれている。館員が差し出してくれた公判記録にざっと目を通す。始めと終わりは型どおりロシア語で、その間に長いポーランド語の本文がある。一風変わったルテニア語の本文。ドイツ軍の將軍たちの写真が載った雑誌はドイツ占領下時代の所蔵資料だ。すべてが永遠に保存されるのだ。

老館員が注意深く一通の文書を私の前に置いた。ユリウス・スウォヴァツキの卒業成績証明書だ。学位記のように厳肅なラテン語で書かれている。スウォヴァツキとミツキエヴィツキはこのギムナジウムに通ったのだ。ちょうどザムコヴァ通りに彼らの住居があった。スウォヴァツキはほとんどが「優」で、ちらほらと「秀」をとっていた。彼は自分の名前を裏面に記している。その筆跡は芸術家らしく繊細で、審美家特有のものだ。

廊下の足元の薄暗がりのなかに、石か石膏製の、ナウムブルク大聖堂にある中世の像のようなトルソがひとつ横たわっている。持ち上げられてデッサンされる時以外は、このように穴ぐらの床に転がされているほかないのだ。ここの鉄の扉の向こう側には——この建物はこれらの扉と暖房された講義室の付近だけが大学で、若者がベンチに腰掛けたり歩き回れるようになっていない。ここでの勉強は他所とは異なっている——この鉄の扉の向こう側には第五番目の学部が入っている。ヴィルノ大学には学部が五つあるのだ。五番目の学部というのは哲学部から分化した学部でも、第二神学部でもなく、美術学部だ。なぜ美術の学部などをつくったのかわからない。私は別に異議もないし、まったく結構なことではある。主任教授はポーランドの有名な風景画家だ。彼には会うことができず、助手が案内してくれた。とはいっても見るべきものはあまりなく、部屋を一つ二つ。そこでは地図の前に

女性が二人立っていた。女性も地図も美術史に関係しているようだ。ほかにそのあたりにあるものといえば、ヴィルノ近辺から出た先史時代の石の出土品や、素晴らしく綺麗なランプ、石膏品といった科学的なもの、芸術的なもので、なかなか一言では表現しがたい。それから鎖と輪が繋がれたあやしげな人間の下腿部。犯罪者かもしれない。ひよつとすると修道僧で、そのように自分たちを罰して埋葬させた贖罪者だったかもしれない。これらの部屋にはひとつの霊が徘徊しているような気がする。あの風景画家の教授の霊で、彼はこれらすべてを糧にして生きているのだ。これは学部というよりも、変化してやまない創造力豊かな彼の思想傾向と言ったほうがよい。彼に活動の場を与えてやるのは結構なことだ。この国が若い国家だということが分かる。

外には美しい方形の中庭があり、^(五)初代学長ペーター・スカルガの名前がついている。下の階はアーケードになっている。上階もそうだったが、ロシア人が壁でふさいでしまった。ロシア人は美や建築様式よりも暖かい部屋を求めたのだ。クレオパトラの首飾りで長靴を結ぶような真似をすべきでないことはもちろんだが、事情次第ではそうしてもかまわないと私は思う。アーケードの上には壁龕がある。聖母像はなくなっていて、銘文だけが残っている。

大学には大学と同じように古い教会もある。私は既にたくさんの教会を見た。この先もまだたくさん訪れることだろう。早く飽いてしまうことがないように用心して、適度に訪問しなければならぬ。最初に拝見したのはフラン風の円柱がある茶色く板張りされた聖具室だ。装飾のように思われたその板壁は、驚いたことに、管理人が引くといいたるところ収納箱になっているのだ。中には何も入っていない。ひよつとするとここで秘術がおこなわれたのだろうか。教会にはほかに黄色と絨緞のような深青色の見事なステンドグラスの窓がある。聖歌隊席からは^(六)モニユシユコの胸像が見下ろしている。彼はポーランドのオペラ作曲家で、私は彼の名前をポーランドに来て真つ先

に耳にした。彼はこの教会でパイプオルガン奏者をしていたのだ。それから記念銘版やオギンスキ伯爵家の立派な礼拝堂がある。そこには専用のパイプオルガンさえある。学生たちがドクトルの学位を授与されるときには、この教会に案内される。たいそう中世的な習慣だ。若い国家がなぜ昔の仕来りを守り続けるのか。三つ挙げることができらう。一つは華美を求めて、二つ目は厳肅さを求めて、三つ目は人を怒らせるために。

このギムナジウムの生徒であったピウスツキが自らこの大学を再建した。ある晩、あるポーランド人将校と面談していると、今日は列車に乗っているピウスツキを見ることができるかもしれない、ピウスツキは近郊の別荘へ行く予定だと言う。でも私は行かない。私は人垣をつくるのに適していない。私の背は低すぎる。

朝、けたたましくトランペットが鳴り響く。ホテルの向かいに消防隊の詰め所があるのだ。入り口から格子枠の馬車が飛び出してくる。馬車には灰緑色の服をまとい、ピカピカの金属製ヘルメットを頭にのせた少数の消防士がだらしない姿勢で座っている。ちょうどヘルメットをかぶり直しているところだ。いくらか古代ローマ風なところがあるヘルメットだ。がたがた揺れる車上で男たちに囲まれて、トランペットを持った男が両足を広げてふんばり、思い切りラッパを吹き鳴らしている。通りを行く人たちは皆立ち止まって、その見事な演奏振りに耳を傾けている。馬車には勇ましい二頭の栗毛がつながれている。二頭は馬車を引いて大通りや路地を抜けばくばくと果敢に火事場に向かっていく。その後を奇妙な装置を載せた馬車が頼りなげに続く。ピカピカの金属製ヘルメットも見えない。あれはポンプ車にちがいない。その後には水色に塗られた大樽をのせた馬車が二台。水を積んで、街路を火事場まで運んでいるのだ。最後に格子枠の馬車がもう一台、奮い立った戦士たちを乗せて行く。普段着姿の者も数人乗っている。皆殺気だつて街中へと急行している。きつと彼らは火事を消し止めるだろう。半時間後、再びラッパ

が響き渡る。彼らが帰ってきたのだ。鎮火したか、あるいは火事ではなかったのだ。

ポーランドやリトアニア、そしてロシアのことをもつとたくさん知りたいのだが、言葉が障害になっている。それにあまり案内してもらえない。ワルシャワを出てから十分に面倒をみてもらえないのだ。

この都市の中心部は狭苦しく古色蒼然としている。こことは違いもつと近代的な顔を持った市区が北の方に続いている。大商店街のアダム・ミツキエヴィツチ通りが東から西へ横断しており、その東端にはカテドラル広場と城のある丘がある。

並木が生い繁るミツキエヴィツチ大通りには立派な大商店が立ち並んでいる。果物店は間口が広く奥行きもあり、品数も豊富だ。幾つかの書店はショウウィンドーいっぱいロシア語の本だけを並べている。ホテル・ブリストルは見たところ悪くはなさそうだ。街一番のレストランに、いかにもロシア風の見事なケーキやチョコレート菓子を飾ったカフェが二店、誰の胃袋に納まるのか、ホールにいっぱい並べられている。通りから少し後退して「ポーランド館」がある。ここでは敬意を表して慎重に歩を進める。ヘジャツキー・クーガン、^(七)「国王万歳」^(八)。おそらくこのジャツキーは逸材なのだろう。しかし調教された動物や天才児というのは私にはいただけない。見ていて恥ずかしくなる。

通りを農民の荷馬車が行く。数台が列をつくっている。彼らは遠くからやって来るため、襲撃を恐れているのだ。御者たちはそのかたわらを歩いている。すぐく小さな荷車もある。農民たちは長靴をはき、黒や白の毛皮の上を着て、毛皮やラム革製の高い帽子をかぶっている。

それはさておき、向こうの方に秋めいて、木の葉が黄色や茶色に染まり、燃え立つように聳えているのが、古都

ヴィルノでも最古の建築物が残る城のある丘だ。昔、ゲデイミナス^(九)というリトアニアの大公がいて、あの丘の上に城を築いた。眼下の異教徒の寺院では火の手が上がった。美しく心のこまやかなポーランド女王ヘートヴィヒを妻として迎え、ポーランド・リトアニア連合によるヤゲヴオ王朝^(一〇)初代の王となった男は、思うに条約によりキリスト教徒となり、寺院に火を放ったのだろう。それに替えて彼はスタニスラフ大聖堂を建立した。キリスト教への復讐として。もしキリスト教徒がうす気味悪いこの建物を見たなら、その人は再び異教徒になるだろう。そのように強いられた婚姻からは何も生まれない。教会はギリシャ神殿かポーランドの市立劇場のような外観を呈している。ビスワ古典様式。死がこの婚姻を解消し、ポーランドとリトアニアは再びはなればなれになったが、大聖堂が廃止されることはなかった。敬虔なカージミール大王^(一一)はそのなかで重さ千二百キロの銀の棺に眠ることになり、八体のポーランド王たちの銀の立像も立っている。いろんなものがあるのだ――。このギリシャ神殿もしくは市立劇場の隣にぼつりと一つの鐘塔が立っている。正午にそこを通りかかると、上でラッパの音がする。塔の上で男が四方に向かつて吹いているのだ。聞いてみるとそれは兵士で、これは駐屯地でのポーランド軍の習慣とのことだ。城のある丘のふもとの公園からロシア人たちはプーシキンの記念像を持ち去った。金属が欲しかったのだろう。^(一二)レネンカンプ軍の退却後は、ここにドイツ軍の本営が置かれて、市立公園では昼時になるとドイツ音楽が演奏された。保養地の公園のように銀行が立ち並んでいる。

丘に登る。赤煉瓦造りの城壁がある。伝説によれば、ここから隣町のトラカイまで地下道が通じているという。下方に赤煉瓦の兵舎が見える。黄葉した低木の茂みが斜面の下へ続いている。白く輝く黒い川面、ヴィリヤ川だ。密集した赤屋根の小さな家々。馬車の車輪の響き。槌音。後ろ脇に目をやると、高い白の十字架が三基並んで立っていて、異様な感じだ。聞いたところではこれらはポーランド人のもので、一八六三年にムラヴィヨフ^(一四)將軍がこの

場所で彼らを処刑させたという。ポーランド人たちはすべてを忘れることなく、既に占領下時代に、この十字架建設に着手したのだ。大砲がある。ロシア人たちは一二時になるとこれで正午を知らせる号砲をとどろかせた。教会での学位授与式、ラッパの吹奏、号砲。たくさん昔ながらの習慣。近頃では時計が普及しているのだが、こういったものはなかなか役所の認めるところとはならない。しばらくの間、私は空を映して白く輝くヴィリヤ川の流れを楽しむ。その向こうには川を囲むように森が続いている。

城前広場と呼ばれている辺りや、そのそばの小さな教会、そして城そのものを上から見下ろして、ふたたび下へおりてみると、城に入る決心がつかない。結局のところ、城なんてものは古いタイプの外国人のためだけにあるのだが、私は新しいタイプだ。が、案内人は見たがっている。彼はヴィルノの人だ。それでは彼に城を見せてやることにしよう。

「ここにはロシアの総督が住んでいたの。」

「そうです」

「わかりましたよ。予想できました。その後、ドイツ人がそれを士官クラブか軍事病院にした。なぜなら、総司令部が向うにありましたね。」

「軍事病院です。」

「門のところの金文字が刻まれた大理石銘板に、ロシアから退却中のナポレオンがここに滞在したとあります。一八一二年十一月二四日の夜、彼は姿を変えてこの市を去ったのです。」

門の前をジプシーの女が一人、子供の手を引いて通りすぎて行く。彼らの多くはロシアから来ていて、市の郊外に住み着いている。案内人は、彼らがボリシェヴィキから逃れてきたと言う。

「彼らはポリシェヴィキから逃れて来たんじゃないですよ、君。権力を握った貧しい人々がやつつけるのは金持ちだけです。彼らはいつも逃げています、というかまったく逃げてなどしていません。放浪しているんです。」案内人に「放浪」という言葉を刻み込むようにして言う。それから城の中庭に入る。午後一時頃のことだ。あちこち歩いてまわっても誰にも邪魔されない。ナポレオンは逃走し、ロシア人たちは撤退し、ドイツ人たちは退散した。今度は私たちの番だ。旗を掲げて、ポーランド語とイディシュ語で、我々は友人としてやってきた、我々と我々の部隊に全面的に協力するように布告を発してみてはどうだろう、と案内人と思いをめぐらす。だが彼はまず門番に尋ねてみたいというので、私としてもそれに異存はない。門番は私たちを認めると驚いてすぐさま昼食に出たが、案内人が彼をつかまえる。彼らは話をしているが、何語を話しているのだろうか。ロシア語だ。彼らはナポレオンを崇拜しているのだが、会話はロシア語かポーランド語だ。私はナポレオンを崇拜しないが、フランス語を話す。門番にフランス語で話しかけると、イディシュ語は話せないと答える。私はがっかりして歩を進め、階段を上る。控えの間が現われる。数世紀を経る間に絨緞は消えてなくなってしまう。さらに舞踏会用の広間へと進む。ぼろぼろのロココ調家具がナポレオン時代を偲ばせる。ありきたりの暖炉が据えられた漆喰の部屋がある。これが城なのだろうか。権力をほしいままにしたムラヴィヨフはぞっとするような部屋に住んでいた。彼の部屋には窓がないのだ。窓がない部屋。それは質素な小部屋だ。彼は不安のあまり、窓のある部屋では眠らなかったのだ。そして今、私は骨の髄までしみ通るような臭気に気が付いた。それはいまだかつて城のなかでは経験したことのないものだ。だが私は城に入ったことを後悔してはいない。これは普通の城ではない。ムラヴィヨフはまだ生きてにちがいない。彼の不安が震撼させるような臭気となっていたちこめている。私自身不安のあまり逃げ出しなくなり、まだムラヴィヨフはいるのかと案内人を通して門番に尋ねる。ムラヴィヨフはまだ生きてにちがい

ない。臭いがする。彼の臭いだ。門番は、まず第一に自分はイディッシュ語が分らない、次にムラヴィヨフは生きていない、とこともなげに答える。そのように臭うのは下水施設で、今はもうない。それは既にナポレオンの時代になくなり、その後は臭気が強まってそれと感ぜられるだけだ。この状態は保存されている。なぜならここはお城で、歴史的な名所であり嗅跡なんだから、と。私はほっとした。残忍なムラヴィヨフはもういないのだ。門番はロシア人たちが残したものをもう一つ見せてくれた。それはいくつかの階段へ通じる螺旋階段で、この大暴君は危急の時にこの秘密の階段を抜けて脱出したのだった。

川に沿って兵舎が連なっている。兵士が大勢訓練している。果てることのない戦争状態。そのずっと向こうに病院がある。大学の施設で、つい最近竣工したものだ。小さな病院で、下の階に外科、上階に内科がはいっている。その庭園の眺めがとても素晴らしい。肥えたまだらの雌牛が草を食んでいるのだ。

ずいぶん冷えてきた。通りを行き交う人々の息が湯気を立てている。いくつかの教会へ案内される。私はおとなしくついて行つたが、教会の中では注意深く目と耳を閉じていた。ある教会では石柱に刻まれたポーランド農民のまるまるとした顔を眺めた。聞くところによれば、別の^{二五}ある教会の前に立ったナポレオンが、これをパリへもって帰りたいと語ったという。結構なことだ。私はどうもこれらの古い芸術作品が好きになれない。橋のたもとにある小さな絨緞織物訓練所のほうがずっといい。木橋の向こう側の小さな建物は今もそうだが、その建物はロシア時代には売春宿だった。この牧歌的な情景に戦争が止めを刺した。現在そこはトントン、カタカタする音、ボタンボタン打つ音、ブーンブーンと唸る音が満ちている。年端も行かぬ少女たちばかりが織機の前に座っている。ちょうどオルガン弾きがオルガンの前でするように座り、ペダルを踏んで、上では両手で糸を取っている。

ドイツ人による占領に関連して嬉しいことを耳にした。彼らは墓地を一般市民用、将校用、兵卒用に三つ残したという。ドイツの神様は民法と軍法にもとづいてお裁きになるのだ。それで、私は郊外にあるザクレートの森で長く長く連なった彼らの墓を見学する。質素な木の十字架、横木が斜めに付いたロシア人たちの風変わりなギリシャ正教の十字架もある。大砲の咆哮するさなかに、或いは病院の大部屋で呻き声に見送られて、この世を去っていった無数の人々がこの下に眠っているのだ。可哀想な人たち。誰もが皆、嘆き悲しみながらこのむごい人生を後にしたのだろう。十字架の間を歩きながら、私は苦悶し恥じ入った。彼らに許しを請わずにいられない気持だ。なぜなら彼らは眠り、私は生きているから。彼らがどんなぐあいなのか、私は尋ねたくはないし、尋ねることは許されない。彼らの墓から青々と伸びた草のように、彼らがのびのびと、安らかであるよう願うばかりだ。

ドミニコ通りに沿って歩く。白い学生帽を被った学生たちとすれちがう。警官が立ち番をし、辻馬車が待っている角のところまで来ると、ドイツ人通りがあり、続いてユダヤ人通りだ。ここでは言葉が分る。商店が立ち並び、たくさんの人々が引いたり、担いだり、たむろしている。ユダヤ人たちだ。カフタン姿の人はまれで、田舎臭いヨーロッパ調の服を着ている。とても狭い裏通り。路地商いが中庭でも行われている。店は開いているが、シヨールウィンドーのある店はあまりなく、獣肉屋と鳥肉屋が軒を連ねている。幾つかの路地にはアーチがかかっている。これは昔、ゲットーの境界を示していたものだ。兵士たちが訓練していたあの丘の麓の川辺と同様に、ここには活気が満ちている、

「ユダヤ人の中庭」へ入る。入り口のアーチの下で少年たちがイディッシュ語のチラシを配っている。広告や集会への案内だ。小さい質素な建物に囲まれた適度な広さの中庭。その幾つかには上り階段がついていて、礼拝所が

並んでいる。一箇所階下へ通じる階段がある。驚いたことに、そこはずいぶん傷んではいるが大きな礼拝堂だ。内部には女性用の棧敷が設けられ、窓は閉じられている。堂内には祈る人、行き来する人、雑談する人でいっぱいだ。その中央には柱に囲まれて、格子柵の付いた木製の高座ビマーが設けられている。ビマーは非常に広く、階段が上へ通じており、周囲にはベンチが並べられている。書物がおかれた一人掛けの机もある。ビマーの上では質素な身なりに礼拝用肩衣をまとった男たちが立ち動いている。女性の姿は見えない。一人の男が歌い始める。会堂に大きなざわめきがおこる。奥の方には天蓋が二つあり、壁に幾つか時計が掛っている。

偉大^{二六}なガオンの礼拝所。一世紀前のヴィルノに生きた偉大な博学のユダヤ人である彼の名を私はたびたび耳にする。中庭から階段を上り、暖房された大きな木造の部屋へ入る。中央にビマーがあり、普段着の上に礼拝用肩衣を掛けた男たちがその上でせっせと動き回っている。一人の男が二本の木の棒に巻かれたトーラーの巻物を手にして、それを室内の人たちに向かって掲げる。別の男が現れて掲げられた巻物をつかみ、しっかりと巻き戻して結わえる。その間にも礼拝式は進行している。幅広の机には年配の男たちが、書物の上に頭を支え、非常に厳しい瞑想的な表情で座っている。背中を椅子にもたせて、白い髭を撫でながら小声で言葉を交わしている男たちもいる。小さなグループでは一緒になって一冊の本を読んでいる。ここは先ほどの大きな会堂よりも一人用机が多い。歩き回る人はほとんどなく、彼らは書物から目を離さない。

このヴィルノのガオンとはいかなる人物だったのか。案内のユダヤ人たちは何でもよく知っている。彼の名はエリヤフ・ベン・シュロームといったが、人は彼を「(判定の)完璧なる分銅」エリア・シュロームと呼んだ。彼は十八世紀の最初の四半世紀に生まれ、八十歳近くまで生きた。彼は既に七歳にしてヴィルノの大きなシナゴークで説教をし、九歳で聖書を、そして十歳でバビロニア・タルムードの大部分を諳んじた。

案内人たちがこれらのことすべてを正確に知っているのは驚くばかりだ。私が学んだことといえばマラトンの会戦くらいのものだ。してみると他に大切なことがまだたくさんあるのだ。なぜその中からよりによってマラトンの事項が選取られたのか。このことに対する関心が失せてからもう久しい。——ガオンは数学と天文学を研究したが、その後、別のことで影響力を発揮した。ウクライナ地方にユダヤ教の「邪説」が現われたのだ。これを唱えたのはタルムードとトーラーにはあまり精通していない一人の男だった。彼はロシアの地方の町や村で貧しいユダヤの民衆に様々なことを語り始めた。この無学なタルムード信奉者とはラビのイスラエル・パール・シエムトブその人だった。彼はベスメドレシユ、すなわち学びの舎にこもることなく、戸外へ出て、鳥の鳴き声や樹木の言葉を学んだと伝えられている。「なんとまあ世界は光と不思議な謎に満ちていることだろう。それなのに小さな手が目をふさぎ、偉大な光が見えないようにしている」と彼は述べている。それから「礼拝のための案内でもなく、神との合一への懸け橋でもない」とすれば、トーラーとは何だろうか。それなのにラビたちはこの目標を追求することをせず、学識を自慢している。タルムードを知らなくても、誰でも皆正しく、偉大であることができるのだ。」無学な人々が彼の元へ押し寄せた。彼は偉大で素朴な人物だったにちがいない。この驚嘆すべき人物は靈魂の偉大な力を、その絶大さを説いた。人々は彼をツァディック、すなわち奇跡をおこし、人々を救う、人間を超えた神秘的存在に加えた。ラビたちさえ彼に従った。喜びと快活さ、ひたむきな祈りを彼は説いた。彼にとって悲しみは非難すべきものに思われた。彼には純粹な思想としての感情がすべてであった。そして森や穀物畑の中で祈ることもまたよしとした。ハシデイーム、すなわち信心深い人々、と彼らは自らを名乗った。

ヴィルナのガオンは一時自分の罪を洗い清めるために流謫の身となり、ポーランド、そしてドイツと放浪した。神に対する義務を果たすために祈りをささげ、精進した。ヴィルノに落ち着き、禁欲的な生活を送り、タルムー

ド、カバ^ラと研究をすすめた。家族にも会おうとはしなかった。彼は熱狂的な知識愛好家であり、厳格な批評家であつた。忌まわしい哲学を追求したとしてあのマイ^モニデスを非難し、偉大なラビ^ニ・イセレスを非難した。あたかもその時、ウクライナ地方にあの無邪気な空想家が現れて、彼の存命中に、しかも目の前でユダヤの民衆を迷わせたのだつた。ガオンには教皇のような權威が具わつていた。ある時、激怒した彼はハシディズムの指導者と信奉者たちを破門した。彼らとの接触を拒否し、これら改革者の話を聞くようにせまられた時には、ヴィルノを旅立つてしまつた。五十二歳の時に初めてハシディームを破門し、九年後に二回目の破門をした。「あのやからを迫害し、もみ殻のように跡形もなく吹き飛ばしてしまふがよい。らいや膿汁に病む者たちのように、やつらの住むねぐらから追放せよ。何人もやつらに近づき、共に集い、手を結ぶことのないように。またやつらの屠つた肉を食すこと、やつらと婚姻を結ぶことがないように。」彼が最後に破門を宣言したのは七七歳の時だつた。その間にこの新しい教義は、——それは新しくもなく、教義と呼ぶべきものでもなかったのだが——広まっていた。パール・シエムはヴォリニアのミエンヰイボルスに住んだ。「神の教えは完璧だ。それは魂に活力を与えてくれる」、そう語つて彼は逝つた。ハシディズムの書物は焚書にあい、迫害は激しさを増したが、ヴィルノの大ガオンはこの運動を阻止できなかったばかりか、それは彼の住む首都に巣くつた。古い信仰を守る人々は自らをミトナグデイームすなわち反対者と自称しなければならなかつた。戦いはやんだ。ハシディズム早期の指導者であるアプトのレッベが早くも次のように表明している。「シ^ユルハン・アルーフがわれわれの王道である。長い流謫の間にこの道にぬかるみができ、通れなくなつた時、パール・シエムがやつて来て、山や森を超えて目的地にいたる乾いた回り道を見つけた。今度は巨大な岩塊がこの狭い小道を塞いでしまい、通れなくなつた。それで新参者たちは危険極まりない新たな峡谷を越えようと、わき道を探し始めている。まさにこの時、パール・シエムの霊が立ち、両手を挙げて命じているの

だ。分別を取り戻して、あまりに困難になってしまった道ではなく、王道に立ち返るように」と。ガオンは敗北しなかった。リトアニアのエルサレムともいえる彼の住む都市ヴィルノは理性的信仰の中心地であり続けた。

歴史家マイヤーはセム人の特徴を次のように記述している。「インドゲルマン人の優れた特色である心情の細やかさや感情の温かさはセム人には見られない。セム人に空想力という創造的形成力が欠落していることはこのことと密接に関係している。」ひょっとすると彼はセム人のなかにユダヤ人も加えていたのかもしれない。現代では、ロシア、ポーランド、西ヨーロッパのユダヤ人について、彼らが何パーセントの割合でセム人なのか言い当てるのは困難だ。また、黒人が白人よりも多く黒い肌を持っているのか、それとも白人が黒人よりも多く白い肌を持っているのかも私は知らない。けれどもバール・シエムやハシディズムの信奉者たちを目の当たりにすればマイヤーはきつと言葉を失うことだろう。

ガオンの文庫で、権勢を誇ったこの男について再び情報を得る。年取った司書が書物を私の前に並べてくれた。すっかりぼろぼろになった大型本。タルムードだ。黄ばんだ紙の上部中央にミシユナとゲマラ(4)のテキストが示され、それを小さな文字で注釈、とくにラシー(10)のそれが取り囲んでいる。白い革綴じの立派な大型本はバビロニア・タルムードのベネツィア版テキスト二巻分の写真版だ。ドイツのユダヤ教研究者シュトラック(11)の名前が出た。ガオンはここで生きたのだ。彼の手になる小判の分厚な本がある。タルムードの注釈だ。ロシアの百科事典にガオンの自画像が載っている。燃えるような眼と引き締まった口元をした、熱狂的な顔付きをしている。顔の周りには炎のように髭が生えている。読書室の壁に並んだ賢者たちの面差しはもつと穏やかで温かい。だが、ガオンの顔と並べると色褪せて見える。温和や分別は強者と並ぶと輝きを失ってしまう。今日のところはそうだ。しかし明日にはそ

の強者もいなくなるのだ。

ユダヤ人とはなんと驚嘆すべき民族だろう。文庫を後にしながら私はそう思わずにはいられなかった。私はよく知らないままに、ドイツで目にしていたもの、せかせかと働く人々や家庭のことにかまけて次第に肥満してゆく商人たち、目先の早いインテリ、繊細な感性を持った、落ち着かない、数え切れないほど多くの不幸な人々のことをユダヤ人と思っていたのだ。彼らは、この地で変わることなく生き続けている民族の中核から遠く離れて隔絶し退化してしまった例だということを、今私は知った。それにしてもこんこんと尽きることなく湧き出る豊かなバル・シェムや陰鬱な炎を宿したヴィルノのガオンのような人々を生み出すこの中核とはなんと驚くべきことか。一見開けていないように思われるこの東部地方で並外れたことが起きたのだ。すべては精神をめぐつてのことだ。精神的なもの、宗教的なものがことのほか重視されている。一部の民衆層だけではなく、全民衆が精神的に結びついている。この民族ほど精神的・宗教的なものに専心する民族は他にほとんど例を見ない。ユダヤ人は国家形態や、革命、戦争、国境線の変更、王、議会と格闘する必要がなく、そうすることが他の民族より容易だったのだ。その心配は二千年前にローマ人^(三三)が取り去ってくれた。そして彼らはまったくそのことに不平を言うことはなかった。彼らがバビロンの流れのほとりに座って涙を流したのはそのようなことのためではなかった。彼らの関心の中心には常に神殿があり、神殿のためにのみ国家を必要とした。そしてシオンの丘に立つものだけが本当の神殿なのだ。国家実現がなかった時、この観念の下に民族全体に徐々に変化が生じた。知らず知らずのうちに領土と国家を持つことへの断念が人々に浸透していった。そして彼らは自らを、自己自身のうちに神殿を持つ、神殿の民とした。未曾有の出来事だ。このことは長い間の不自然な制約の下でのみ起こりえたことだった。

もし今、歴史のねじを巻き戻して、彼らに実際にシオンを与えるとすればどうだろう。このことが差し迫った問題となっている。もはや古くからの不自然な制約を保ち続けることはできない。その厳格さは弱まっている。近代が、すなわち経済的必要がユダヤ人を隔離状態から押し出しつつある。帰還運動、これが進行している。成就の悲劇が進行している。たとえ彼らが神殿を求めてそれを見出したとしてもそれは神殿ではないだろう。信仰心の篤い敬虔な人々はそのことを知っている。神殿を与えることができるのは救世主だけだ、と彼らは言う。正真正銘のユダヤ人たちはもうずっと前から「国家」実現を待ち望んではない。彼らは精神的なものにおいてのみ存続できるのだ。それゆえ彼らは精神的なものにとどまらなければならない。政治はこの世ならぬものを実現することはできない。政治が生み出すものは政治ではない。「新しい」時代は彼らにとって何ら問題ではないのだ。

とはいえ今日の政治的・経済的な外的状況や民衆の困窮は否定できない。古い組織体は変化に対して強力に抵抗するだろう。「国家」、「議会」が姿を現したのだ——ガオンやバール・シエムに対抗して。

解体し変革する諸勢力を目のあたりに見る。東ヨーロッパにおける民衆の解放は民族という堅固な枠組において、民族的なものを最重要視して起きている。

このことについて高い教育を受けた紳士が教えてくれた。何と彼はドイツ生まれで、ドイツでは大学の私講師をしていた。博士号を三つ持っており、——ラビのイスラエル・バール・シエムトブはタルムードを十分には知らなかった——非常に高名な専門医であると同時にヘブライ語ギムナジウムの校長でもある。彼が机にかけて私に話している間にも、患者たちが片足を引きずりながら電気治療にむかっていた。この中年の男性は戦争中にヴィルナへやってきた。彼の話によると、当市にはヘブライ語古典ギムナジウムが一校とヘブライ語実科ギムナジウムが一校

ある。一校には生徒が約五百人おり、他校には約二百人いる。それからヘブライ語小学校が二校と幼稚園が一校あり、フンボルト・アカデミーのような夜間大学が準備されている。ヴィルノ地域にはヘブライ語小学校と数校の中等学校がある。西歐式に編成されたギムナジウムでは、授業でヘブライ語を用い、西欧の科目に加えて、古代、中世、近代のヘブライ語文学やタルムードといったヘブライ語文献学とユダヤ文献学を教えている。ギムナジウムは授業料によって運営されており、授業料はものすごく高額だ。

ヘブライ主義運動はタルブートすなわち文化運動であり、シオニズムと同一ではない、と彼は説明する。ヘブライ語がユダヤ人の日常語にならないといけない。イディッシュ語は借用語で一種のドイツ語方言だ。シルクハットは借りても言葉は借りるものではない。言葉は民族の本質的特質となるものだ。ヘブライ語学校は各地において周辺世界をヘブライ語化しなければならない。イディッシュ語は政治的に左翼の人、非宗教的な人や反宗教的な人たちによって奨励されている。イディッシュ語とヘブライ語の確執においてある種の階級層が顔を出していることは認めなければならない。イディッシュ語を望んでいるのは下層階級で、ヘブライ語は中間層階級だ。大学人たちはユダヤ民族主義的・シオニズム主義の立場だ。タルブート運動は聖書やタルムード研究が示しているように宗教には反対していない。ヘブライ語による文化運動を望んでいるのだ。シオニストにとってはシオンそのものが目的だが、タルブート支持者にとってはヘブライ文化達成のための手段だ。

ヘブライ語教員養成学校へ行く。それは一風変わった建物で、他にユダヤ人共同体本部とイディッシュ語教員養成学校が入っている。何らかの理由でこの朝は授業が行われていない。シオニズム主義の代議士が来ることになっているのだ。私は平凡な顔をした若い男性に紹介された。彼は私にヘブライ語で話しかけ、私がヘブライ語を解しないとみてとると、私を無視する。この愚かな教師はその後タバコを吸いながら十七歳から二十歳の若い男女の一

団と雑談に興じている。元気のよい若者たちが話しているのはヘブライ語だ。私にはどうしても、まるでドイツにいてフランス語を話しているように感じられて仕方がない。彼らは熱心に、どうやら大変上手に語学の知識を操っているようだ。ばかみtainな教師に代わり、若い娘が私を案内してくれる。彼女によると、ここの修業年限は四年間で、百三十人が在籍しており、その六〇パーセントは女子だ。彼女たちは聖書、聖書釈義、タルムードといった古代・中世のヘブライ文献や、哲学的文献を研究しているという。これらを研究しているというのは、彼女の言うとおりでろう。彼女たちが反宗教的というのではないが、ただ彼女たちにとって宗教はどうでもいいのだ。科目のなかには体操も入っており、彫刻、図画、歌唱もある。

そつと抜け出して、反目しあう同胞が入っている別の翼棟へ行く。イディッシュ語信奉者たちのところでも授業が行なわれていない。それでも一人の教師をつかまえる。この学校には生徒が百十二名いる。親は労働者、職人、小売商人たちだ。その人が言うには、ヘブライ語信奉者は実際のところ離散先でのヘブライ語の価値を認めてはいない。パレスチナにおけるヘブライ語使用については議論するまでもない。それは人為的運動だ。ヘブライ語信奉者の大部分は同化を隠そうとするブルジョアの同化ユダヤ人で、彼らは職務外ではポーランド語を話しているのだ。

一人新聞記者がそこに居合わせていた。非常に優れた頭脳の持ち主で、言語学者でもあり、熱心なイディッシュ語信奉者だ。彼の説明によれば、シオニズムは西欧人にとっては民族的高揚を意味し、東欧人にとっては帰還を意味する。シオニズムは精神的にも経済的にもユダヤ人問題を解決できない。パレスチナは遠い将来にいたるまで選ばれた者たちだけのものだ。そのような目的のためにポーランドのユダヤ人にすべてを犠牲にさせるのは政治的に誤っている。ヘブライ主義は不毛であり期待できない。それはもっと重要な点でユダヤ人を弱体化させる。ポーラ

ンド人の間でシオニズムが非常にもてはやされ、イディッシュ語運動がまったく不人気なのはきわめて興味深いことだ、と彼は言う。よく観察すれば分かることだが、シオニストは教育を受けた社会的地位の高い人たちだ。シオニズムはいかなる義務も負わせない。ポーランドではお金を寄付すれば立派な人間でいられるのだ。しかしここヴィルノ地域では民族主義者でブントに属する彼らが圧倒的に優勢だ。三千人の子供が彼らの小学校で学び、イディッシュ語中央教育委員会がヴィルノにおかれている。文科系ギムナジウム一校、実科ギムナジウム一校、小学校八校、幼稚園二校、労働者のための夜間学校、それに教員養成学校がある。

イディッシュ語の女子学校。十二、三歳のとてもかわいい少女たちが二十人くらい、行儀よく座っている。清楚な服装で、多くは栗色の髪をしており黒髪はほとんどいない。彼女たちは何かの作品をもとに女性の境遇について議論をし、ユダヤ初期における女性の地位の低さを猛烈に批判している。利口そうなかわいらしい少女が一人、前方で教師のそばに立って、クラスに向ってゆつくりと話している。後の席では隣りの子の髪を引っ張っている少女がいる。一番後では二人の子がまず手を握りあい、それからすばやく抱擁しあう。彼女たちのテーマはユダヤの英雄叙事詩について、そしてそのようなものが存在するのかについてだ。今度は前方に座っていた黒いスカートで黒褐色のお下げ髪の少女が立ち上がる。ぴっちりした青い木綿のブラウスからはよく發育した胸が張り出している。活発かつ明快な授業だ。彼女たちは教師と一緒に笑っている。

別のクラスでは小さな少女たちがポーランド語の授業を受けている。手を挙げたり手足をばたばたさせて、でんでに答えているのが可笑しい。ポーランド語の本を机の上においている。ポーランド人作家からの抜粋だ。一人の小柄な少女の黒髪の頭が少年のように短く刈られている。最初のうち私は彼女を男の子だと思っていた。その後、彼女が前に出てくると、スカートの下から白いズボン下が二本のぞいている。

低学年のクラスでは男の子も女の子も同席していて、かわいいイディッシュ語の詩を暗唱している。そのような詩がたくさん載っている本がある。⁽⁷⁾その中から一つを挙げてみる。

鳥さん 鳥さん

—— ピー ピー ピー

父さん どちら

—— お家にいません

お帰りはいつ

—— あす 朝はやく

おみやげななに

—— ビールを一杯 コップにいれて

どこへおくかな

—— 戸のしたよ

ふたはどうする

—— 紙でする

飲むのはだあれ

—— わたしとあなたよ

もう一つ挙げてみよう。

あの小高い丘の

緑の原に

長い鞭をもち

ドイツ人たちが立っている。

その身の丈は高く

長上衣を身につけている。

主なる神よ

私の心は喜びにあふれています。

さあみんなで楽しく

ぶどう酒をいただきましょう。

揚げたパンをいただき

神がおわしますことを

忘れないでいましょう。

それから、

君の頬は――

薄紅色の花のよう

君の唇は――

砂糖のように甘い。

君の瞳は――

黒いさくらんぼのよう

その甘い唇に

くちづけできたなら！

君の髪は――

波打つビロードのよう

君の手は――

二十日大根のよう。

一つに結ばれた

君の心とぼくの心

けれど知る人はいない

ぼくたちの心の痛手を

きわめて古ドイツ風の調べをもったこれらの詩は、ユダヤ民衆の間で育まれてきた。イディッシュ語信奉者はこ

の財産を手放そうとはしないし、ヘブライ語信奉者は別のものを持っている。

あるギリシャ専門家が次のようなことを語っている。

「遠くへだたった先祖の文籍遺産を過度に保護奨励するのは総じて東洋的であり、ギリシャ人は本質的に東洋人である。中国に至るまでのたいていの東洋諸民族はその土地の言語の他に、古の賢人たちが用い、多少ともふせられた聖職者の言語をもっている。——アラビア人も、モスルからメッカに至りそこからモガドールにまで至る地域において、書き記され理解される古代の神聖な文字言語を持っている。その一方でこの広大な地域のそれぞれの国では、互いに甚だしく相違した、ずっと若い民衆の言語が用いられている。」

つまり、バール・シエム対国家、中世対近代という対立ばかりでなく、東洋対西洋という対立があるのだ。ユダヤ民族における第一の亀裂は、世俗政治に対するガオンとバール・シエムの対立だ。

第二の亀裂は解放ユダヤ人を引き裂く社会主義者とブルジョア国家支持者の対立だ。社会主義者は普遍的人道主義者であり、偉大な超国家的理念に立つ老ガオンの路線を守るのによりふさわしい。

イディッシュ語学校やイディッシュ語教員養成学校もヘブライ語学校、ヘブライ語教員養成学校と同じような印象を与える。後者のヘブライ文学とタルムード、前者の実学重視というそれぞれのプラス面を考慮しても変わらない。どちらも民族的刻印をおびてはいるが西欧的な教育施設だ。彼らの教室やカリキュラムを一瞥すれば、イディッシュ語やヘブライ語を話していても、彼らが西欧的であることが分かるだろう。ともに現代的民族的な西欧人で、文明人なのだ。

ユダヤ人が暮らす国の政治・経済は彼らを猛烈に現代文明の懷に追い込んでいる。これは「ユダヤ民族の世俗

化」と呼ばれる。この過程において数百万人のユダヤ人がヨーロッパの自由な民族としての新たな感情に目覚め、古くからの軽蔑と隷属の重荷を払いのけようとしている。そして、少数民族でいるか、あるいは宗教に端を発する古いアジアの郷土を所有することを望んでいるのだ。

古い世界が崩壊しつつあるなか、大衆は定められた不可避の道を歩んでいる。ただ、西欧の諸国民がもはや見向きもなくなってしまったような装いはしないように気をつけてほしいものだ。

午後、イディッシュ語劇場で子供向けの公演があった。劇場広場にある大きな堂々とした建物は以前は映画館だった。一階席も階上席も小さい子供や大きい子供でいっぱいだ。男の子も女の子も皆きちんとした服装で元気がよい。彼らのうちユダヤ人と分るのはごく一部だけだ。「人種」という考え方がいかに馬鹿げたものか、明らかだ。いろいろな類型の子供たちがここにいて、皆ユダヤ人であり、そう望んでいる。明らかにいろいろな人種の特徴が混じっており、これにスラブ的ポーランド的環境からくる影響が加わっている。演目はシヨールム・アツシュの「泥棒モトケ」で、イディッシュ語で演じられる。アメリカで何百回も上演されたこの作品はもともと小説だった。少年モトケは第一幕で泥棒として登場し、家を出る。父親が彼を追い出そうとするが、母親は彼を慰め、放そうとしない。モトケは母親を脅し、約束する、「二頭立ての箱型馬車に乗って帰ってきてやる」と。第二幕では、彼はあるサーカスで馬丁になっていて、評判のよくない女のとりこになっている。女は彼と一緒に駆け落ちしようとして、言い寄る金満家からお金を盗み取る。そして身分証明書も手に入れるため、モトケの手にナイフを握らせる。第三幕ではモトケは売春宿の主で、客引きもすれば暴力も振るう屈強な男になっている。そんな時、彼は「心のきれいな娘」に出会う。破局が暗示される。彼は自分の生活が嫌になる。この娘との結婚を望み、サーカス時代から彼につき従い、今は娼婦となっている女を追い払うのだが、時すでに遅すぎた。すぐに第四幕が始まる。

モトケは自ら凶運を招きよせる。彼は心のきれいな娘に——この娘は住み込みで女中をしているユダヤ人だ——すべてを告白したいという気持ちを抑えることができない。彼女に話せば許される、解放されるとの思いから、過去を打ち明けずにはおれない。また、話さないわけにはゆかないのだ。なぜなら娘が彼を呼ぶのは、彼が持つ身分証明書の男の恐ろしい名前なのだ。彼は死人の名を名乗りたくはない。それを聞いた娘は愕然として言葉を失う。むごいことではあった。しかし、娘の両親もまたそれを聞いていた。そして彼の母がやってきて幸福の絶頂にあるとき——「おふくろが二人になった」と彼は彼女たちを抱擁する——警笛が鳴り響く。警官がなだれ込んでくる。逃げ場を失った彼は窓から飛び出す。

詩的心情と優れた技巧に裏打ちされたこの魅力的な作品は注目すべき素晴らしいステージになった。演出は感動を狙い、それを誇張によって達成しようとい意図している。激情的な身振り、過度の強調、これらが舞台から観衆に訴えかけてくる。ただ母親だけは目立たなかった。演技も素人くさい。利口そうな生きいきした子供たちの表情はどうだろう。晴れ晴れとした活発な社交。私はまるで魔法にかけられたように歩き回る。

私を案内してくれるのは、繊細で情感豊かな女流詩人だ。都市よりも、風景よりも心楽ませしてくれるのは選り抜きの人間だ。

日曜日、二人の若者に案内されて、郊外にある古いユダヤ人墓地へ行く。途中で、墓地は多分閉まっているだろうと彼らが言う。その大きな木の門の前に立ってみると、やはり閉まっている。管理人は近隣の人ではない。二人のうちのより抜け目のない方の若者がすぐに、心配なくてよろしい、コンビネーションでゆきますと宣言した。彼は《コンビネーション》という言葉は何度か得々として使い、もう一人がそれに同意した。何が始まるのか、興

味津々だ。墓地への入り口は木の門でできていて、内側から門がかかっている。周りには板塀と大きな穴の開いた金網の垣根がめぐらされている。一人がもう一人の上にあがり、塀に登って向こう側へ飛び降りる。これがコンビネーションだ。一分と経たないうちに門が開き、言うのも厭わしいが、私たちは笑いながら墓地に入って、背後に門をかける。

そこは立ち木がまばらな、まずまずの広さの芝地で、あちこちに単独で、あるいはまた群れになって、低い墓石が不規則に立っている。枯葉があちこちに散り、くぼ地になっているところで堆積している。霧雨が降っている。板碑には赤と黄色の四角張ったヘブライ文字で長い碑文が刻まれている。板碑の多くにはライオンが描かれている。あちこちに石や煉瓦のかげらが散らばっている。ひどく荒れた墓地だ。多くの墓石の上には小石や小さな煉瓦のかげらが置かれている。それらの小石の下には麦わらが敷かれ、ヘブライ文字が書かれた札も置かれている。それらはここで祈りを捧げた敬虔な人々が残していたものだ。というのも彼らは有名人や聖人たちの墓に祈りを捧げるために遠方からやってくるのだ。彼らをここへ駆り立てるのはあの不分明な深い感情だ。彼らは、まだどうかして聖人が自分の墓の身体のところにおいて、先祖が生きていた時にそうしたように、聖人に近づくことができると思い、また感じているのだ。死者は墓と結びついていて、消えた魂は亡き骸と結びついていて、祈りによって呼び出すことができる、そして敬虔な聖人レッベは普通の人間よりも神に近いので、神から、あるいは神を介して、より多くを享けることができる、と。——ここはすべてが荒れるがままになっている。号令をかける声、兵士の歌う声が聞こえる。そして不意にモーと鳴く声がある。壊れた板碑が積まれた小さな起伏を上ってみる。上に立つと、下で牝牛が一頭草を食んでいる。墓地の草を食んでいるのだ。周囲には牛の糞がころがっている。

ずっと脇のほうに大きな墓が立っている。ゲル・ツエデックだ。^(二五)案内人が彼の物語を話してくれたが、私はすで

にそれを知っていた。彼は若いポーランド人伯爵で、ヴァレンチン・ポトツキといい、一人の友人と共にローマとパリの大学で学んでいた。彼がパリの街をぶらついていたらある時、一人の老ユダヤ人が座したまま祈りをささげ、書物に没頭している姿を目にした。伯爵は老人と言葉を交わした。伯爵と彼の友人は再々やって来ることに、老人はユダヤの書物に書いてあることをすべて彼らに教えることを約束した。彼らは何ヶ月も通った。終いにこの二人の友人はカトリックへの信仰を失い、老人と同じユダヤ教徒になりたいと願うようになった。二人はユダヤ教に受け入れてもらえるよう手を尽くし、制約がないアムステルダム市で認められた。彼らは髭を生やし、カフタンを着て、貧しいユダヤ教徒となつてポーランドへ帰つてきたが、それ以上の詳しいことは私は知らない。若きヴァレンチン・ポトツキの両親はローマとパリで彼を捜したが、見つからなかった。何年も経つてから一つの告発の知らせが届いた。ヴィルノに一人の敬虔な男が住んでいて、ユダヤ教徒から崇拜されている。名前はゲル・ツエデックと云うのだが、これはあのヴァレンチン・ポトツキ伯爵だ、と。恐ろしい衝撃が伯爵家を走った。彼だと認定され、彼もそれを否定しなかった。背教者を改心させるべく力が尽くされたがむだだった。裁判が行われ、彼は当ヴィルノ市で火炙りの死刑判決を受けた。十八世紀末のことだ。火刑が執行された翌日に判決が破棄された。家族は彼の墓を用意していなかった。死者の信奉者だった敬虔な一人の男、ラビ・レゼル・ズイスキは番人たちを買収して火刑場に入り、遺灰と遺物を探し集めた。そしてそれらのものを、私が立っているこの場所に埋葬した。この場所は長く隠れたままではなかった。墓から一本の木が育ち、その幹が墓の上で奇妙な風に曲がつて枝を垂らしたのだ。ポトツキの友人は発見されることなく、結婚してパレスティナをめざした。

その墓と石囲いと奇妙な木を眺める。墓の向こう側には乱雑に瓦礫が放り投げられている。その間には黴の生えた丸太がある。これらはゲル・ツエデックの墓から生え出た木の一部で、誰かが切り刻んでしまったのだ。誰がそ

んなことをしたのだろう。兵士たちの歌声が近づいてくる。見ると兵士たちの一隊がゆるやかな列になって、大きな金網の裂け目を通り抜けている。その中には馬に乗った下士官がいて毒舌を振るっている。彼らは馬の手綱を引いて、食料桶を運んでいるのだ。そうして歌を歌い、大声で騒ぎながら、彼らは墓地を抜けて兵舎から兵舎へと行進してゆく。瓦礫の山を馬と共に乗り越えて、手入れされた墓は迂回してゆく。ゲル・ツエデックの墓が兵士たちによって破壊され、木が切り刻まれたのはそれほど昔のことではない。彼らは捕らえられ処罰された。彼らはここを通過することを禁止されているのだ。しかし、兵舎から兵舎へ移動するのにこの道はかなりの近道だし垣根は壊れている――。ここヴィルノのユダヤ人は誇り高いが、それは徹底しているというよりきわめて東洋的などころがあるように思われる。草が高く生い茂っていて、盛り土の上の打ち砕かれた墓石を何度も踏みつけてしまう。それらの墓石にはしばしば古くから強さの象徴である立派な尾をふるライオンが刻まれている。ヴィルノのガオンの墓。鉄柵が取り付けられた低い石の廟堂は今閉じられている。中には彼の墓と親類縁者の墓がある。彼はここで生前にあまり知ることがなかった人たちと一緒に入っている。妻が死んだ時、「私は食べるのにずいぶんと不自由しなければならなかった。けれどもそれはトラーと神のためだった。でもお前は私という一人の人間のために不自由な生活をしなければならなかった」と彼は語った。彼の墓石の上とその付近の床には文字の書かれた小さな紙片が山のように置かれている。外の鉄格子にさえ藁と小さな草束に結わえ付けられて紙片が掛けられている。

当市にはカライ派のゲマインデがある。トラカイには大きなゲマインデがあるようで、ガリツイアのハルチとウツチにもあるようだ。一般にはカレーア (Karäer) でなくカライート (Karait) と呼ばれている。ユダヤ教の一分派だ。当初、土地も国も神殿も持たなかったユダヤ人はパレスチナとバビロニアでタルムードを発達させ、紀元

四世紀に集大成した。その後、ある歴史家が「タルムード研究は記憶に頼るだけの無味乾燥なものに墮してしまい、精神的豊穡さを失ってしまった」と記述している事態が生じた。ある時バビロニアで、あるユダヤ人指導者の息子がタルムードに敵対する運動を起こし、聖書に帰るよう迫った。ユダヤ教のルターのような人物だ。彼は聖書から読み取ることができると思われる戒律を厳格に守り、それ以外のものは廃止した。ユダヤ教の新旧両派は互いに相手を異端呼ばわりした。カライ派はタルムードを重視するラビのユダヤ教と猛烈に敵対しつつ、今日なお存続している。彼らはヴィルノの郊外に新しい教会堂を建立した。それを見ておきたい。

途上、案内人が次のようなことを話してくれた。昔ヴィルノではカライ派が大きな勢力を持っていた。中央ユダヤ教会堂は彼らの手中にあった。あるとき深刻な論争が生じた。ポーランドの大王カージミールがユダヤ人に特権を与えようとしたが、カライ派か《ラビ派》か、どちらが真のユダヤ人なのか、権限をどちらの手に渡せばよいのかという疑問が持ち上がったのだ。それは祭式、シナゴグ、自治すべてにわたる権力だった。王は両派の代表者を召しだした。ラビ派教徒一人とカライ派教徒一人がカージミールの前に現れた。広間に入る時、カライ派は汚れた靴を脱いだ。そばにいたラビ派もそうした。だがその後で、彼は靴を小脇に抱えて、玉座の王の前に立った。カージミール大王はこれをいぶかしく思った。「ラビよ。どうしたのだ。靴を小脇に抱えたりして。何ゆえそなたは他の者たちのように靴を外へ置いておかないのだ。」ラビは答えた。「王様、靴の取り扱いについて私どもに不満があるわけではございません。けれども私は靴を外に置いてはおけませんでした。そのようなことはできませんでした。このことについて私どもの聖書の例からお答えしたく存じます。聖書にはこう書かれております。モーセが義父であるミディアの祭司ヤトロの羊の番をしていた時、全能の神の住むホレブ山にやってきた。茨の茂みから激しい炎が上がり、その中に主なる神の使いが現れた。モーセは近づいた。すると主はモーセに言った。モーセよ、

モーセよ、お前の立っている場所は聖なる地だ。靴を脱げ。私どもの指導者モーセは——彼の御名が祝福されますように、主のお命じになったとおりにいたしました。これは聖書の物語るところでございます。さてモーセが茨の茂みの中から出てきて、靴をさがしたとき、王様、靴が見つかりませんでした。誰かカライ派の者が、モーセの背後にいて、靴を盗んでしまったのでございます。」カライ派はぶったまげてラビに食ってかかった。「何を言う。なんてことをカージミール大王に申し上げるのだ。大王に嘘の申し立てをするなんて。嘘だ、王様、嘘でございます。カライ派がモーセの靴を盗んだなどとは。カライ派だと、ラビよ、自分で墓穴を掘ったぞ。モーセは茨の茂みの中に一人きりでいたのだ。一人きりで。モーセがホレブ山に行った時、カライ派はまだ存在していなかっただろう。」レッベは笑いながら大王におじぎをし、カライ派におじぎをして、さも大事そうに靴を抱きしめた。「王様、彼が申していることをお聞きください。私ではございません。彼自身が申していることをお聞きのうちえ、ご判断ください。彼はこのように申しております。私どもの指導者モーセが、——いつまでも彼に神の祝福があらんことを——ホレブ山に向かった時、カライ派はまだ存在していなかった。彼氏自身が申しておるのでございます。彼の近くにいたのはミディアの司祭ヤトロの一族だけでございました。彼は私どもの聖書をよく知っております。それですのに彼はこの場に出てきて、カライ派でありながら、私に難癖をつけようとしております。あなた様から特権を受け取ろうとしております。なぜなら彼のほうがより高貴で本物だからと申すのでございます。より高貴なのはどちらでございましょうか。父より子供が高貴ででしょうか。どこの世界に父親よりもより高貴で本物の子供がおりましようか。子供と申しましたが、ほんとうにそうなのでございましょうか。それがどんな子供なのか、本物の子供なのか、そんなことがないように祈りますが、すりかえられて父親が知らん顔をするような偽の子供なのか、分つたものではございませんし、確かめようもございません。」カージミール大王は両手を挙げ、ラビや廷臣と一緒に

なって笑った。カライ派は罵り声をあげた。しかし、ユダヤ人の特権はレッベが手に入れた。

ミツキエヴィツチ通りをずっと下って彼らの寺院へゆく。広いマルクト広場や新しい裁判所の建物のそばを通り過ぎると、川が流れている。霧雨が川面を曇らせている。橋向かいの森林におおわれた起伏の多い地形の中に異国風の間口の広い大きな教会が悠然と立っている。黄金色の丸屋根をもったロシア教会だ。そしてそこからほど遠くないところに、緑の中に埋もれるようにしてカライ派の小さな教会堂が立っている。ビザンチン風の丸屋根をもった真新しい建物だ。側面から入ると、内部は簡素で非常に明るい。そこにはまさしく純粹主義的プロテスタント的簡素と厳格さがある。会衆用ベンチの列が左右に並んでおり、そこに五十人から六十人ほどの男女が顔を前方に向けて立っている。男たちは帽子をかぶっている。何人かは礼拝用肩衣の名残りである短くて幅のせまい白い礼拝用肩掛けをかけている。彼らが見やる前方には、壁の上部に金色のヘブライ文字で十戒が掲げられている。祭壇は一段高くなっている。その前方中央に青いテーブルクロスの簡素な台があり、その上には赤く刺繍されたテーブルランナーがかけられている。聖書なのだろう、台の上には赤い装丁の非常に厚い本が置かれている。ずっと奥の壁は金糸織りの幕で閉ざされている。前方で歌を歌い、祭式を執り行っている人がいる。後姿が見えるのだが、背の高い人だ。濃紺の祭服の上にカトリックの聖歌隊が着る短白衣のような白い上着をはおって祭壇の下に立っている。彼が振り向くと、今度は前方席右手にいる二人の平服の人が代わって歌う。時折会衆が歌うようにアーメンを唱和する。オルガンもなければ聖歌隊もない。男女たちが読んでいる本には角張ったヘブライ文字が書かれている。多くのベンチの引き出しにはその他の本も入っている。皆静かに立っていて、一人として体を動かす者はいない。何人かは胸のところで手を合わせている。次にベンチから男が一人進み出て、聖餐台の前にひざまずき、床の上に頭をしっかりとつけてから立ち上がり、赤く装丁された厚い書物を台から持ちあげる。会衆が歌うなか、彼はそれを

ずっと奥に運び、戸棚の中に納める。これで礼拝は終わりだ。人々はゆつくりと本を片付け、礼拝用肩掛けを小袋や皮のバックにしまっている。そのあと彼らが私のそばを通って廊下を出て行く時、私は彼らを観察することができた。多くの人が帽子をかぶっていて、職人か労働者か小売商人のように見える。お互いにロシア語を話しているが、ポーランド語の人も何人かいる。イディッシュ語を話す人はいない。彼らの素性はさまざまだ。ユダヤ人らしい表情や顔立ちの人は半数もない。そのほかはロシア人かポーランド人で、スラブ風の頬骨や幅広の短い鼻などモンゴロイドのあらゆる特徴を持っている。会衆が寺院から出た後で、説教者か先唱者かがゆつくりと中央通路を通り抜けて行く。頭には外套と同じ濃紺で、周囲に白い筋が一本はあった、丸い平べったい帽子をかぶっている。白髭で典型的なスラブ風の顔立ちだ。

退出の際に激しい口論がおきる。寺院の裏庭に、板で囲い、慣例通り緑の枝で葺いた大きい仮庵が立っているのだが、何人かの外国人が裏庭を越えてカライ派の人たちと一緒に仮庵の中に入ろうとしているのだ。しかしカライ派の人たちはこれを認めない。平服のカライ派の人が一人の男性に向かって、ここは彼が来るようなところではない、他人のベッドには入ったりはしないものだ、とロシア語で怒鳴りつけている。ほかのカライ派たち、特に一人の女性がこれに加わる。外国人たちは引き返さざるをえない。会衆全員が裏庭をわたり、祭司と一緒に大きな共同の仮庵のなかに消えてゆくのを私は扉のところに立ったまま見守る。

案内人たちはそこで自分たちに対して向けられた憎悪に興奮し啞然としている。帰路、彼らは、当地のカライ派はほとんどロシア語しか話さないが、彼ら同士の間ではある種の「テテール語」、つまりタタール語を話していると教えてくれる。どうしてこのような言語を話すようになったのかについては、彼らは知らない。

原 注

- (1) 仮庵の祭りは一〇月一五日から二二日まで続いた。
- (2) カバラ ユダヤ教の神秘主義思想の名称。
- (3) シュルハン・アルーフ 一六〇一七世紀の儀式に関する規則の概説。
- (4) ミシュナ タルムードの最も古い基本をなす部分。
- (5) ゲマラ タルムードの一部分を構成する。ミシュナの注釈。
- (6) プントに属す 「プント」、すなわちユダヤ社会主義党の黨員。
- (7) (三編の詩は原文ではイディッシュ語であるが、訳は主として原注にあったドイツ語訳に拠った。)

訳 注

- (一) ヴィルノ リトアニア共和国の首都ヴィリニユスのポーランド名。ポーランド王国とリトアニア大公国は一三八五年に合同し、翌年、ヤギェヴォ王朝ポーランドが誕生した。それ以後、両国は深い関係を保つ。一九二〇年のリトアニア独立直後から一九三九年のポーランド分割までの間、ポーランドはヴィリニユスを占領し、自国に編入した。
- (二) 一九二〇年にポリシェヴィキが： ポリシェヴィキは旧ロシア社会民主労働党の左派。一九一八年、リトアニアではロシア赤軍の下にソビエト政権が宣言されたが、一九二〇年に撃退された。
- (三) ステファン・バトーリ 一五三三—一五八六。一五七二年のポーランド王ジグムント・アウグストの死後、国王選挙が行われ、フランス・バロア家のアンリが選ばれたが、その翌年、フランス王位につくため帰国してしまった。このため再度行われた選挙で、トランシルバニア公バトーリが選出された。ジグムント・アウグストの妹アンナとの結婚が条件であったという。大学は一五七九年、イエズス会の学校として建てられた。
- (四) ドイツ占領下時代 一九一五年—一八年。
- (五) ペーター・スカルガ 一五三六—一六一二。ポーランドの著名なイエズス会士、説教家、神学者。
- (六) モニュシユコ スタニスワフ・モニュシユコ (一八一九—七二二)、ポーランドの作曲家。ヴィルノで教会のオルガン奏者を務めたり合唱団を組織するなど、一般民衆の音楽活動に尽力した。ショパンと並びポーランドのロマン主義音楽を代表する作曲家とされる。
- (七) ジャッキー・クーガン 一九一四—八四。チャプリンの映画「キッド」などに出演して、天才子役の名をほしいままにした。その後も長く映画界で活躍した。
- (八) 王様万歳 一九二三年制作のアメリカ映画。ジャッキー・クーガン主演。
- (九) ゲデイミナス リトアニア大公 (在位一三一六—四一)。リトアニアの諸部族を統合してリトアニア大公となったミンダウガス

の孫で、リトアニアの英雄と讃えられる。ヴィルノに首都を置いた。

(二〇) ヘートヴィヒ ポーランド女王ヤドヴィガのこと。一三八六年リトアニア大公ヤギェヴォと結婚し、ヤギェヴォ朝成立の契機をつくった。

(二一) 初代の王となった男 リトアニア大公ヨガイラ(ポーランド名はヤギェヴォ)はポーランドによる大公国の吸収合併とリトアニアのカトリック化を条件に、ポーランド女王ヤドヴィカと結婚して、ブワディスワフ二世としてポーランド王となった。在位一三八六—一四三四。

(二二) カージミール ピヤスト王朝最後のポーランド国王、カジミエシュ三世。大王と呼ばれる。在位一二三三—一七〇。

(二三) レネンカンパ パベル・カルロヴィチ・エードラー・フォン・レネンカンパ(一八五四—一九一八)。ロシアの將軍。第一次大戦においてロシア第一軍司令官としてドイツに進軍した。

(二四) ムラヴィヨフ ミハイル・ムラヴィヨフ(一七九六—一八六六)。ロシアの將軍でヴィルノの總督。一八六三年の一月蜂起では、大量虐殺によってリトアニアの蜂起を鎮圧し、後に「首吊屋」と呼ばれた。

(二五) ある教会 聖アンナ教会。十六世紀後半に建てられたゴシック様式の教会。

(二六) 偉大なガオン 後述のヴィルナのガオンのこと(一七二〇—一七九七)。

(二七) イスラエル・パール・シエムトプ 生年一七〇〇年頃—一六〇。

(二八) マイモニデス モーゼス・マイモニデス(一一三五—一二〇四)。中世において最も影響力のあったユダヤ人思想家。合理主義の立場からユダヤ法学を変革した。「モーセの前にモーセなく、モーセの後にモーセなし」として、十戒を授かったモーセ以来、マイモニデスに比すべき人物はいないと言われた。

(二九) ラビ・イセレス 数多くの著作と高い学識により、ポーランドのマイモニデスと称された。

(三〇) ラシー ラビ・シュロモ・ベン・イツハック(一〇四〇—一一〇五)。旧約聖書およびバビロニア・タルムードの注解者。

(三一) シュトラック ヘルマン・レープレヒト・シュトラック(一八四八—一九二二)。プロテスタントの学者であり、著名なユダヤ教研究家。一八八三年、ベルリンにユダヤ教研究所を創設した。

(三二) ローマ人が取り去ってくれた。バビロン捕囚後に再建されたエルサレム第二神殿は、紀元七〇年ローマ軍によって完全に破壊され、ユダヤ人は追放されて流浪の民となった。

(三三) シオニズム エルサレムにあるシオンの丘にちなんだ名称。一九世紀末のヨーロッパにおける反ユダヤ主義の高まりの中で、居住国への同化によってこれを克服することをあきらめ、母国への帰還と民族国家建設を目指した運動。

(三四) ショーレム・アッシュ イディツシユの小説家、劇作家(一八八〇—一九五七)。

(三五) ゲル・ツェデック 一八世紀のリトアニアの高名なラビ。名前のゲル・ツェデックはヘブライ語で「ユダヤ教に改宗した者」の意。

(三六) ユダヤ人指導者の息子 アナン・ベンダヴィド(八〇〇年頃没)。聖書に基づく成文律法を守る原理主義の立場から、口伝律

法「タルムード」の權威を否定した。「カライ」とは「聖書を読む人」という意。

訳者あとがき

本訳は岡山商大論叢第三十八巻二号から第三十九巻一号に訳載したアルフレート・デーブリーンの「ポーランド旅行」の続きで、同旅行記の第三章にあたる。

デーブリーンは一九二四年の一〇月初めにはワルシャワに到着していたが、仮庵の祭りの叙述から見ても、一〇月下旬の一週間あまりをヴィルノで過ごしたものと思われる。

当時リトアニアは、長年のロシアによる支配とそれに続く第一次大戦時におけるドイツ支配を脱して、一九一八年二月にヴィルノを首都として独立を達成したものの、依然として危機的状況にあった。一八年末にはソビエト・ロシア赤軍が侵攻して、ソビエト政権が樹立された。翌年二月にリトアニア義勇兵の活躍により、ポリシェヴィキを撃退したものの、一九二〇年にはポーランドがヴィルノを併合し、その後の一九年間、リトアニアの首都はカウナスにおかれた。デーブリーンが訪れたヴィルノはこの激動の時代の動揺が未だ冷めきらない頃であった。

デーブリーンはそのような時代の空気を呼吸しながら、独特の批評眼をとおして、ヴィルノ市の街の様子や生活、とりわけ人々の信仰生活などを描いている。

なお、イディッシュ語の詩の翻訳については一部、イディッシュ語・イディッシュ文化振興社団法人のロベルト・ノイマン氏から貴重なご教示を得ることができた。ここに付記して、感謝の意を表したい。